

## 【学位論文審査の要旨】

本学位論文は、2004 年の津波災害後のタイ・プーケット地域を対象にし、地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの持続的な発展の仕組みをムスリム系コミュニティと仏教系コミュニティを事例にして明らかにすることを目的とした。プーケット地域はタイを代表する国際観光地のひとつであり、マスツーリズムが広く発展した地域でもある。2004 年の津波災害後、外発的な観光発展や外部資本の投入によるマスツーリズムとともに、地域の資源や人材、および地元資本を活用し、内発的な観光開発のひとつとして地域コミュニティ基盤型エコツーリズムは発展するようになった。本学位論文では、マスツーリズムの対極に位置づけられる観光形態として地域コミュニティ基盤型エコツーリズムを取り上げ、その持続的な発展の仕組みを明らかにしたことが観光科学研究の新しい視点として評価できる。

本学位論文の研究方法では、地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの理念的な発展メカニズムのディメンジョンを従来の研究を整理して明らかにした。具体的には、従来の地域コミュニティ基盤型エコツーリズムは経済、環境、政策、経営、社会、歴史文化の 6 つのディメンジョンから構成され、それらの有機的つながりが持続的な発展の原動力になっていた。しかし、タイ・プーケット地域のようにムスリム系コミュニティと仏教系コミュニティが混在する地域では、従来の 6 つのディメンジョンの組み合わせだけでは説明できないと考え、従来の 6 つのディメンジョンに宗教・精神性を加えた 7 つのディメンジョンからなるモデルを考案した。次の段階では、この 7 つのディメンジョンからなる地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの持続的な発展モデルをタイ・プーケット地域で検証した。同時に、このエコツーリズムの持続的な発展モデルにおいて、7 つのディメンジョンの有機的な繋がりがムスリム系コミュニティの場合と仏教系コミュニティの場合とでは異なるのか否かを明らかにした。

2004 年の津波災害後に地域コミュニティ基盤型エコツーリズムが発展したプーケット地域の典型的なムスリム系コミュニティと仏教系コミュニティにおいて、地域住民に対するアンケート調査や地域コミュニティのキーパーソンにおける聞き取り調査が行われた。それらのデータから、地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの持続的な発展モデルを 7 つのディメンジョンから構築した。2 つのコミュニティのエコツーリズムの発展モデルを比較すると、発展の仕方やエコツーリズムの取り組み方に違いがみられた。特に、自然環境をネガティブに捉える仏教系コミュニティと、自然環境をポジティブに捉えるムスリム系コミュニティに大きな違いがみられた。このような違いは、津波被害からの復興の仕方や自然環境の保全・活用の仕方、あるいは経済的な持続性に反映された。実際、仏教系コミュニティが津波被害の復興や自然環境の保全・活用が個人レベルの経済的持続性の原動力に留まったのに対して、ムスリム系コミュニティでは共同体レベルで展開した。これは、宗教・精神性に基づく活動におけるコミュニティ共同体としての在り方の違いを反映していた。

結論としては、宗教・精神性のディメンジョンが地域のまとまりやコミュニティ共同体としての行動・規範に影響を及ぼし、地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの発展や持続性の仕組みに大きく寄与していることを明らかにした。このことは、従来から指摘されていた地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの持続的な発展モデルを改良し、より現実の現象を的確に説明できるモデルを提示し、オリジナリティのあるモデルを開発したことになり、大いに評価できる。本学位論文で明らかにされた地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの持続的な発展モデルは、タイ・ブーケット地域を事例としたものであるが、世界の地域コミュニティに基づくエコツーリズムは、さまざまな宗教や精神性を基盤として発展している場合が多い。例えば、ヨーロッパにおけるカソリックとプロテスタントとの宗教・精神性の違いは典型的な地域コミュニティの違いとなっており、そのような場所での地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの持続的な発展を読み解くカギを本学位論文のモデルは提供することになる。したがって、本学位論文における地域コミュニティ基盤型エコツーリズムの発展モデルは汎用性も高く、今後の観光科学の研究の発展に寄与するものとなっており、本学位論文は、博士（観光科学）の学位授与に十分値するものと判断できる。